

ベナンにおける言語政策の変遷

平成 20 年入学

参加したフィールドスクール：エチオピア・フィールドスクール

調査地（調査国）：ベナン共和国

山瀬 靖弘

キーワード：言語，歴史，民族，生活，浸透

自分の研究テーマについて

アフリカ諸国における社会言語学的研究について、タンザニア、セネガル、南アフリカ共和国などを取り上げた研究はある。だが、ベナンについて触れたものは少ないのが現状である。ベナンについては、特に日本で研究している研究者が少ないだけでなく、旧仏領という背景もあり、日本語や英語の文献や論文が、他のアフリカ諸国よりも豊富にあるとは言えない。そのため、現在のベナンの言語状況を深く理解することは難しい状況にあると言える。

本研究では、ベナンの言語状況にはどのような側面あるのか、ベナン国民は現在の言語状況や国語教育についてどのように考えているのか、また、ベナン政府がどのような言語政策をとってきたのか、などといったことについて考察していきたい。

ベナンは、日本の3分の1ほどの国土面積だが、54の言語を有している国である（参考 URL 「Ethnologue」）。そのため、子供の時から母語以外の言語を話すことがしばしばあり、2言語間で似た単語の意味やニュアンスの違いでトラブルを起こすことがある。また、子供の頃からこのような環境におかれているため、多言語であることに関する問題に日常生活で頻繁に触れており、ベナン人は自国の言語状況について、何らかの考えを持っている人が多数いる。さらに、ベナン人は自分の民族の言葉に誇りを持ち、可能であれば学校教育において、自分の民族の言葉を勉強したいと言うベナン人も多くいる。



ベナンの都市部はバイクがたくさん走っている。



ベナンには高い山が少なく、なだらかな丘陵が多い。

フィールドスクールから得られた知見について

エチオピアではアムハラ語が広く利用されている。これは、19世紀後半のメネリク2世の南進や、1970年代の識字化などの歴史的背景がある。フィールドスクールで訪れたエチオピア南部は、多くの民族語が話されている地域だが、このような地域でもアムハラ語の影響が見られた。それは借用語の導入や、コードスイッチの発生だけではない。例えば、エチオピア南部に多くいるアリ人は、伝統的な名前よりも、アムハラ人の名前や聖書から引用した名前を用いる人が多くいるということを講義で学んだ。また、交通事故防止を呼びかける看板や、コーラやファンタなどの容器にもアムハラ語が表記されていたほか、テレビ放送もアムハラ語だった。このように、歴史的背景以外は明らかではないが、エチオピア人の生活の中に、アムハラ語が浸透していることが伺える旅であった。

私が調査しているベナンでは、人名、看板、商品名や放送の多くにフランス語が使われている。エチオピアの言語状況を見て、エチオピアにおけるアムハラ語が、ベナンのフランス語と似た関係であるように思えた。例え複数の言語が同一国内に存在しても、その国の中に地位の強い言語が存在し、その強い言語が人々の生活に浸透していく。アフリカの人々は、自分の民族の言葉を家庭や地域で運用する。時には、他民族の言葉も運用する。そういうわけで、アフリカにおける言語状況がより複雑なものとなるのだろう。

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

私の研究テーマに生かすためには、まず調査国の歴史を整理しておく必要があると改めて実感した。エチオピアの場合、アムハラ語が広まった背景に、メネリク2世の南進政策や、1970年代の識字化などが重要事項として考えられる。ベナンの場合、どのような歴史的背景があって、今の言語状況が生み出されてきたのか。これをより深く知るためには、ベナンの歴史を整理することが必要である。また、民族構成についても同様である。それは分布だけでなく、どういった民族間関係を持っているかということである。エチオピアでは、アムハラ人が権威を持っていた歴史がある。ベナンの場合、どの民族が権威を持ち、国を成立させてきたか。また、どういった関係を民族間で持ち続けていたのか。このような点を整理しておく必要もあると思われる。これらを踏まえた上で、現在の各民族の言語分布や力関係にどう影響しているかについて、明らかにすることが可能だろう。



アムハラ語で、『安全運転を！』
エチオピア南部でもアムハラ語。



ベナンの地理の教科書(左)と歴史の教科書(右)はどちらもフランス語表記。

参考 URL

Ethnologue. http://www.ethnologue.com/show_country.asp?name=BJ (2009年4月23日)